

平成27年11月14日(土)

老球の細道180

ハチの一刺し

会津バスケットボール協会 室井 富仁

11月8(ハチ)日だからではないだろうがハチに刺されてしまった。日曜日のアスリートクリニックを終え家に帰り着替えたところ、右肩で注射に刺された痛みを感じた。何だろうと思って左手を右肩にそえたところ、今度は左親指に針で刺された痛みのダブルパンチ。すぐにTシャツを脱いだところ中からハチが飛び出してきた。身の危険を感じ必死になって私を反撃してきたのだろう。わたしも還暦だといえ、華麗(加齢)に老いることをモットーに励んでいることもあり、ハチに負けるわけにはいかない。武器も持たずに取り押さえて、殺すのも大人げないので外に逃がしてやった。その後刺された箇所は赤くはれ上がり、3日過ぎてもまだ晴れとかゆみがとれない。恐るべしハチの一刺し。

明治の偉人、福沢諭吉の論文に『やせ我慢の説』というのがある。諭吉が66歳の時に書いている。その中で「やせ我慢こそ人でも国でも独立を保つための大事な資質の一つである」と論じている。

【国が滅びそうになり、またたとえ敵に対して勝つ見込みがなくても、つらいことや苦しいことに耐えて精一杯努力し、勝負がつく時になって初めて講話するか、死を覚悟するかを心に決める。それこそが道である。これが、世の中で言う「やせ我慢」である。

強い者と弱い者が相対している状態で、それでも弱い者が己の地位を保っていられるのは、この「やせ我慢」があるからである。・・・中略・・・。

たとえ小さな虫でも、何百キロの鉄の槌で打たれる時は、それでも自分の足を振り上げて抵抗するのが常である】

この『やせ我慢の説』は明治維新の際に江戸城をあっけなく引き渡して抵抗しなかったとして、勝海舟らを批判していることでも有名である。これは別に明治維新を批判しているわけではなく、「薩長が強いからと、簡単に無抵抗降伏した」行為を批判しているものである。この時期、日本はまだ小国であり、列強にいつ飲み込まれてもおかしくない時代だった。これらの言葉は、日本を憂う精神が言わせたものなのだろう。

・・・盛田則夫著〈超訳福沢諭吉生き抜く哲学〉より・・・

いよいよミニバスケットボールの優勝大会が始まる。今年は坂下ミニバスを中心に合同クリニックを開催してきた。主なるテーマは「プレスアタック」。地区のトップクラスのチームは集まらなかったが、プレスディフェンスに対してボール運びに苦労しているチームが合同で練習を重ねてきた。半年間でどのくらい上達しているか見るのが楽しみである。

弱いチームが強いチームと対戦した時、試合の状況が思わしくなくなってくると、コーチもプレーヤーもあきらめがちになる。そこを「やせ我慢」の心意気で我慢強く戦ってほしい。たとえ勝利に恵まれなくとも、強いチームに必死のハチの一刺しをする気構えを持って、最後まで抵抗することで次の展望が見えてくる。

勝ち負けは時の運。実力差のある戦いは「局所戦」で挑むべし。焦点は、今まで練習してきたことがどれくらいゲームでできるようになっているか、バスケットボールの神様がほめてくれる「4つのやり過ぎプレー」(①リバウンド②ルーズボール③ディフェンスプレッシャー④声出し)をどれだけがんばれたか。真の戦いは、敵は我にあり。